裏から咲かせる笑顔と歌声

ゆごりー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自分は不良ではない。彼自身はそう自分に言い聞かせていた。両親が気に食わない。両親が言っていることが正しいのか間違っているのかが分からない。親にばかり反抗する彼は周りには至って普通に接している・・・つもりだった。そんな彼が織り成すわんだほーいなストーリー。

目　次

プロローグ ―― 1
本物、決意までの見物 ―― 4
自由かどうかを決めるのもまた自由 ―― 9
セカイ　オドロキ　イキトウゴウ ―― 13

プロローグ

家はほんの少しだけ他のところとは違うらしい。かと言っても別に虐待やらなんやら犯罪的なことをされているわけじゃない。スマホを自室に持って行っては行けなかったり、親がこんな年になっても口うるさかったり明らか理不尽なことで怒ってくるとかそんな感じだ。しかしそういうことを繰り返しているうちに俺は

咲人「ふっざけんじゃねぇ!!ぶっ殺すぞ!」

大爆発した。犯罪されてる訳じゃない、少し変わってるだけだ。そう言い聞かせている家に俺は両親に叫び散らかし掴みかかってきた父親を思いっきり殴り飛ばして自室に入っていった。その日から俺、桜小路　咲人（さくらこうじ　さくと）の人生が思いっきり変わったのだ。

～数年後～

あれからいくらか月日が立った。俺が反抗を示してから数年。本来反抗期が落ち着いてくるようになった高校1年になったこの歳。俺は未だに親に顔も出来るだけ合わせたくないし声も聞きたくないという思いは全然消えていなかった。この数年、1回グレ散らかして喧嘩にあけくれた日もあったが今では落ち着いて普通の高校生として過ごしている。そんな今の俺があけくれていることとは

咲人「～♪」

自由を探すこと。今は幼馴染に勧められたビビットストリートと言う裏道っぽい所で歌っている。外という開放感あるところで歌っているとなんだか自由を感じられるのだ。

??「おう、やっぱお前か？」

咲人「ん、彰人か。」

こいつが東雲彰人。先程言った幼馴染で親の相談、歌の事を色々教えてくれた。

彰人「良いのが聴こえてきたからな。お前だと思ったんだよ。」

???「彰人、ここにいたのか。あ、桜小路も一緒だったのか。」

こいつは青柳冬弥。今では彰人のパートナーとしてＢＡＤ　ＤＯ

GSというタッグを組んでストリートで音楽をやっているらしい。彰人に聞いただけだがクラシック経験者らしく歌は俺も聞かせてもらったが素人なりにもかなり正確な音なのが分かった。

彰人「ああ、ほんとお前、こっちの世界来たら絶対時間はかかるかもしんねぇけど上手くいくと思うぞ？」

咲人「はは、ありがとうな。でも気持ちとしてはそこまで本気で歌ってるわけじゃねえからさ。それじゃあ真剣にやってる、それこそお前らに失礼ってもんだろ？」

そう、俺は開放感、自由を感じたくて歌をやっているのであってなにか目標や夢があってやっているのではない。なのでハコでは歌わない、という線引きを自分でしていた。

冬弥「彰人、彼はいつもそう言ってるだろう？」

彰人「まあな、でもこの才能をこのままにしとくのは勿体ないしな。」

冬弥「まあもしその気になれば俺達も全力でサポートする。それより桜小路、ショーが好きじゃなかったか？」

咲人「ん、ああ、好きだぞ？それがどしたん？」

冬弥「当日券で申し訳ないんだがフェニックスワンダーランドのフェニックスステージのミュージカルショーの入場券を友人から譲り受けてな。いるか？」

咲人「ん、マジ？いいの？」

冬弥「ああ、俺らはこれから謙さん達のところに行くし、この件も無駄にしたくないんだ。貰ってくれると助かる。」

咲人「じゃあ遠慮なく、当日券なら・・・今から急げば間に合うな。サンキュ！」

速攻に片付けてフェニックスワンダーランドに足を向けた。我ながら本当にいい仲間を持ったものだ。冬弥も俺の事情を知っててよく気を使ってこういうのを持ってきたりしてくれる。彰人と冬弥は違う方向で俺を精神的に支えてくれる。こういう事があって俺はグレから戻れたと思っている。

咲人「〜〜♪」

そして最終公演でウッキウキでショーを見に入る。ショーも俺は好きだった。登場人物の主人公はほとんどの人物が自由かつ努力家出みていてとても気持ちがいいのだ。悲しいストーリーもあるがそういうのはあんまり見ないようにはしている。全く見ないわけではないが。

～数時間後～

咲人「いやー、満足満足ー♪」

外を見るとすっかり夕方だった。もうアトラクション乗る時間でもないので帰ることにした。うっきうきの上機嫌で帰路を辿る。やはりフェニランの中央格のステージだけあって完成度もかなりのものだった。鼻歌交じりで帰っているとどこからか歌声が聞こえてきた。

～～～♪

なんて綺麗で透き通る歌声なんだろうか・・・まるで俺が求めるような・・・足が勝手に釣られるようにその歌声の場所まで向かっていた。シブヤの公園でその歌声の主を見つけた。

???「～～～～♪」

咲人「・・・」

こんな感覚いつぶりだろうか。心から安らぎを得るというか、眠気がするほどの安心感に包まれるというか・・・

???「・・・あ」

そしてその歌声の主と目が合う。これが俺の人生を2度目、大きくねじまげることになる。

本物、決意までの見物

咲人「・・・あ、ごめん。」

目が合った少女に謝罪の意味を込めて会釈する。

???「あ、いや、その・・・」

その場でそこで歌っていた少女はしどろもどろし始めてしまう。それもそうだ。知らない男が急に現れて1人練習?しているところを聴かれたのだから。おそらく人見知りしているのだろう。なので俺はここから何も言わずに立ち去るのが普通だろう。

咲人「あ、ええっと、すまなかった。」

もう一度会釈してその場を去る。その少女もただこくっと頷いて答えてくれた。大通りまで出て再び先程の歌を思い出す

咲人（あれは、有名なミュージカルの曲だったな・・・今日は何かとミュージカル関連に縁があるな）

そう思い今は気分も良かったのでまた少しだけ歌って帰ることにした。大通りの端っこの方に移動し歌うためマイクやスピーカーの準備を始める。もう日が傾き始めた頃だ、曲選は優しめに柔らかい曲を・・・

咲人「〜〜〜〜♪♪」

モチベーションも良くて声もよく伸びた。とあるミュージカルのエンディングで歌われる曲だ。声の伸びや滑らかさ、いかに透き通らせるかが大事になるが、フェニックスステージでの舞台、先程の少女の歌でいい意味でテンションが上がっていたので喉の調子はすこぶる良かった。いつもよりも心無しか足を止めてくれる人も多い気がする。

咲人「ふぅ、ありがとございました。」

さすがに夜も更けてきたので切り上げようかと考え始めたその時だった・・・

???「済まない、少しいいかな?」

咲人「ん、あんたは?」

そこに1人の男が現れた。見た目は俺とさほど年齢は変わらない

ように見える。優しい第一印象を与える柔らかい声の持ち主だった。
類「ああ、失礼。僕は神代類だよ？」
咲人「桜小路咲人だ。それで、なんの用？」
類「歌声が素晴らし買ったので足を止めたまでだよ。今の曲は有名な・・・」
咲人「ああ、知ってるのか。」
類「うん、そこで相談なんだが・・・」
彼はフェニランの小さなショーチームの役者兼演出家をしているらしい。そしてカバンの中身を見せてもらったがロボットがかなりの数入っていた。神代によると最近歌声やパフォーマンスがマンネリ気味になっているらしい。そこで俺の声を使ってみたいそうだが・・・
咲人「1人の声で変わるもんなのか？」
類「そうだよ？考えてでも見てくれないかい？うちの団員は4人なんだが君が1人ずつ歌うだけで4つも違うレパートリーになるんだよ？3人で歌う、全員で歌う、1人増えるだけでやれる事は沢山増えるんだ。ショーで演技をしてくれとまでは言わないんだ、頼むよ。」
咲人「んー・・・」
フェニランのステージということも教えてくれてるし金を要求されているわけでもない・・詐欺とかでは無さそうだが、ショーか。表舞台に立つのとかは気が引けるがやってみないことにはな。
咲人「・・・明日そのユニットで集まるのか？」
類「ああ、来てくれるのかい？」
咲人「とりあえずは行くだけな？」
類「ああ、十分だよ♪」
今日はステージの場所だけを聞いてまた明日という事になった。正直なところを言うと彰人や冬弥以外にこういった形で歌を褒められたのが初めてで少し舞い上がっていた。ショーというものに少なからず憧れはあったし、俺が求める自由もあるかもしれない。行く価値は十二分にあると思った。
～翌日～

昨日は帰ってから親の顔を見ることなく就寝出来たため昨日に引き続き心の健康状態は良かった。昨日はあの神代という人にフェニランのオープン前に入れるパスを予め借りていた。

咲人（・・・ショー目的で何度か入ったことはあるけど、オープン前ってこんなに静かなんだな）

スタッフや整備の声や音は聞こえてくるが客のザワザワしたのは聞こえてこない。

咲人（まぁいっか、ええっと場所は・・・）

伝えられて大人が通るには少し細い道を通ると小さいが確かにステージと呼べるものがそこにはあった。

類「・・・あ、来てくれたんだね♪」

咲人「まあ、俺が行くって言ったしな。」

類「ふふ、それもそうだ。じゃあ行こうか？こっちだよ。」

そのまま神代に案内される。客席も多少ボロいが十分な数にある。補強されたあとも見られて十分に客をいれられそうだ。ステージも近くで見ると補強がなされており十分に機能を発揮してくれそうだった。

咲人「して、メンバーは？」

類「今は裏で作業をしているよ。呼んでくるから待っていてくれるかい？」

咲人「ああ。」

咲人（声の数からしてあいつ含め４、か５か？）

そして数分後、

類「彼らがので僕とショーをしている仲間さ♪」

司「ハーっハッハッハ！俺はこのワンダーランズ×ショータイムの座長、天翔るペガサスと書き天馬、全てを司ると書いて司！」

咲人「・・・・・・（ミミフサギ）」

司「おい！なぜ耳を塞いでいる！」

咲人「いやうるさい、口だけじゃなくて存在がうるさい１回存在ごと黙ってくんね？」

司「おい！なんだと！初対面でそれは酷くないか？」

初対面で天翔るとかペガサスとか言うようなやつに言われとうないわ。
咲人「はいはい天馬ね。覚えた覚えた。次お願い」
えむ「はいはーい！鳳えむだよ！今日は類君に新しいキャスト候補が来るって聞いてずっとワクワクしてたんだ！」
咲人「そうかそうかよしよし、飴ちゃんあげるから1回落ち着いてくれる？」
えむ「わーいやったー♪」
司「おい！なんか俺の時と違くないか！」
えむという少女が雨を舐めてる最中ちょっとだけパニクった頭の中を整理する。え、なに？鳳って言ったか？鳳って言ったらこのフェニランを運営、経営してる代企業の・・・滅多にない苗字だし娘さんか。そんなお嬢がなんでこんなボロステージで・・・てかペガサスうるさい。
咲人「とにかく、鳳だな？よし覚えた。次は・・・」
???「え？・・・え、えっと・・・」
見覚えのある少女だった。狼狽える声は昨日公園で、俺が神代に誘いを受けるきっかけとなった歌を歌うさらにきっかけとなった少女
類「すまない、彼女は人見知りをしてしまうのでね。僕から紹介させてもらうよ。彼女は草薙寧々。このワンダショの自慢の歌姫さ♪」
歌姫、そう言われて俺も納得する。昨日練習とはいえ彼女の歌声を聞いた俺には歌姫たる所以、実力も理解出来た。
咲人「無理に話さなくていいぞ？あくまで俺は補佐で来てるから。」
寧々「あ・・・ご、ごめん」
謝られてしまった。そんなつもりはなかったんだがな・・・
咲人「そんで神代。俺はこれからどうすればいい？」
類「ふふ、難しい事ではないよ？これから僕たちが簡単なショーをするから、それを見て君が加わるか否かの判断をしてくれればいい。君の実力は言伝だが僕からみんなには伝えてあるから君の入団を拒むものはいないし入ってくれるのならバイト身分にはなってしまうが正式にワンダショのキャストとしての扱いをさせてもらうよ？」

咲人（ふむ、いたせりつくせりって訳か。だがまぁ確かに見て見ないことには分からんな・・・ほとんど演技も歌も未知数。コイツら自体の雰囲気は俺はかなり好きだし、俺自身にも合っているとは思うが、やりたいかどうかは別だしな。）

そう考えている間にワンダーランズ×ショータイムのショーが始まった。

自由かどうかを決めるのもまた自由

彼らのショーには驚かされることがたんまりあった。
司「こ、これは、なんて大きなドラゴンなんだ!!」
あの天馬、とかいう奴も声が響くのでショーとして見ると割と聞き取りやすく動きも立ち回りも大きくステージの端から端まで最大限に利用していた。
えむ「ふっふっふー!さぁ私のドラゴン!やっておしまーい!」
鳳は持ち前の身体能力の高さで演技を大きく見せている。意外と役にも入り込んでいて演技の仕方も子供受けしそうだ。
類「ふふ♪次は・・・」
神代は今は前には出ていないが聞き取りやすいナレーション、ロボのドラゴンの操作、など役者と裏方。今日にこなしていた。そして今日1番おどろいたのが
寧々「私の歌でドラゴンを眠らせてみせましょう。〜〜♪」
やはり草薙の歌声だった。公園で聞くのとは違う響き方。そしてその場の空気を支配するような、支配というのは正しくないか、優しく抱擁するような、安心するような歌声だった。ストリートで歌をたまにやっているとこちらにもほかの歌声が聞こえてきたりするのだがここまで魅せられたことはなかった。そして俺は、
咲人「・・・」パチパチ
無意識のうちに拍手を送っていた。
類「どうだったかい?僕たちのショーは。」
咲人「・・・正直舐めてた。結構4人ともやるんだな。」
司「はーっはっはっは。そうだろうそうだろう?この俺が座長を務めているんだからな!」
咲人「・・・それを言わなきゃ素直に褒めようと思ったのに。」
司「な、何!?」
寧々「全く、だからいつも司は余計にうるさいって言ってるのに。」
咲人「草薙も良かったな。歌声の伸び、声質、抑揚に強弱。素人目だが非の打ち所がなかった。歌い方を教わりたいくらいだ。」

寧々「え?う、うん。その、ありがとう。」
目を逸らしながらお礼を伝えてくれた。人見知りしつつ、天馬には毒を吐いてるがこういうところを見るとあ、いい子なんだなぁと小並感があるがしみじみと思ったりする。
えむ「ねえねえ、私は私は??」
咲人「そうだなー。動き方も良かったし、自分の能力をよくわかってる感じがするよな。それも声も出るし歌も上手かったし。まぁこれも素人目だが」
えむ「えへへー。ありがとう♪」
類「それじゃあ改めて聞かせてくれ?僕たちのショーを手伝ってくれる気は無いかい?君の声があれば何百とショーの幅が広がるんだが・・・?」
咲人「ああ、結構レベルも高いし、願ってもないが逆にいいのか?こう言っちゃなんだが結構４人の世界でショーが完成しつつないか?俺がそこに割り込んでもいいものか・・・」
類「そこも上手くやるのが演出家である僕の腕さ。そこは心配してくれなくていいよ?今は君が入りたいかそうでないか、それを聞かせてくれないかい?」
さっきまでののほほんとした雰囲気ではなく真剣な瞳で聞いてくる、そこまでに俺が欲しいのか、俺でなくては行けないのか・・・思うことはあったが、
咲人「・・・わかったよ。そこまで言うなら。自由にこき使ってくれ。」
類「ふふ、感謝するよ♪」
司「そうかそうか!ところで、咲人と言ったか?」
咲人「ああ、なんだ?」
司「類のことを信じてない訳では無いが、お前の歌も聞かせてくれないか?なぜ類がお前を引き入れたくなったか、滅多にこういう提案はしないからな。かなり気になってる。」
えむ「私も私もー!」
口には出さないが草薙も興味はあるって目でこっちを見ている。

神代はよく分からないニヤニヤした顔でこっちみてるし・・・やらないって選択肢は無さそうだな・・・

咲人「はぁ、わかった。1曲だけだぞ？」

そしてステージのスピーカー、マイクを借りて1番ストリートでも歌う曲、バーチャルシンガーの初音ミクの歌を歌い始めた。ストリートでの勝手しか分からないのでいつも通りのパフォーマンスと声で歌わせてもらったが、天馬と草薙はじっくりと聞いててえむは目をキラキラさせながら聞いていた。

咲人「ふぅ、こんなもんかな？どうだった？」

司「・・・文句ないな。なにか音楽はやっていたのか？小さい頃習っていたとか。」

咲人「いや、全くない。最近知人に少し手ほどきを貰ったくらいでガッツリやってたって時期はない。」

類「ああ、それは僕も初めて聞いたがなら尚のこと好都合だよ♪それはまだ君の音楽は方にハマりきってないということだ。これから僕らのショーに染めやすくなるからね♪」

ふふふと笑う神代だが、何考えてるか分からないだけに実は結構怖い。あのドラゴンとか、機械系諸々は神代が関与しているみたいだし。大丈夫だよな？ある日起きたら人造人間になってるとか、口から火が出るようになるとか、ロケットパンチがでるとか・・・流石にないか。

えむ「うん！私もすっごく賛成！なんか咲人くんの歌声、ふわふわーーってしてるのに体にはメリメリーーー！って入ってくる感じがするの！寧々ちゃんも賛成だよね!!」

寧々「ちょ、、えむ近すぎ。ん、そうだね。私も、賛成かな。」

満場一致でよろしくを頂いたところで今後の予定を詳しく聞いた。練習は各々予定がなければできるだけワンダーステージに顔を出すこと、自主練もできれば怠らないで欲しいこと。など色々だ。そもそも俺は暇な時間はずっとストリートで歌ってたのであまり努力量は変わらないか？

類「今伝えることは以上だよ。何かほかに行きたいことはあるかい

？」
咲人「いんや、特に」
類「そうかい？じゃあ早速だが明日から顔を出してもらってもいいかい？渡したいものも色々あるからね？」
咲人「りょーかい。じゃあ今日は先に・・・ん??」
曲でも聴きながら帰ろうかとミュージックアプリを開いたがダウンロードした覚えのない曲が入っていた。
咲人（『セカイはまだ始まってすらいない』？広告では無いな、どう見ても。知らないうちに入れてたか？）
そう思い何となくその曲をタップすると
咲人「!?」
急に視界が真っ白に染まった。

セカイ　オドロキ　イキトウゴウ

一瞬ふわっとした感覚がした。気を失ったのか？それとも夢を見ている？そんな思考が頭をよぎったがすぐにそんなことはなくこれは現実だと理解することになった。

咲人「おっと・・・・・・ここは、」

急に足場が見えたので着地するとそこは遊園地だった。遊園地だったのだが・・・

咲人「・・・ここ、明らかにフェニランじゃねえな。ジェットコースターとか飛んでるし・・・ジェットコースターが飛んでる!?」

思わず2度見をしてしまった。だって、そんなの有り得るのか？周りをちらほら見るとカラフルな雲、ジェットコースターの周りを走るメリーゴーランドの馬。あれは、人形だろうか？非現実的なことをまるで具現化したような空間が目の前に広がっていた。

咲人「・・・なんじゃこりゃ。」

思わず無意識的に後ずさりながら圧倒されているとふと背中をポンッと叩かれる。バッと振り返るとそこに立っていたのは

???「初めまして！咲人くん！待ってたよーー♪」

咲人「は、は？、え？ミク？初音ミク？」

そこに立っていたのはミク、と呼ぶには髪の毛の色は若干違うし格好もまるでショーキャスト。俺の知っている雰囲気や性格では無さそうだがそれは声、顔、総合的に見てもどう見ても初音ミクであった。

咲人「な、なんで、いやそれよりもその格好・・・てかここはどこなんだ？」

ミク「うーん、そんなたくさん言われてもミクわかんないよー　」

咲人「わかんないよーって・・・」

しかし驚いている場合ではない。この奇妙な場所、方向感覚も掴めないしもちろんだが土地勘もない。オマケに周りで起こっているメルヘンチックな出来事やミクの存在。落ち着かないとそもそもここから出ることも不可能だと思った。

咲人「・・・じゃあ1個だけ聞かせてもらうが、どうやったらここ

から出られる？」
ミク「えー！もう帰っちゃうのー？」
咲人「もう帰っちゃうって、来たくて来た訳でもないし、正直今めっちゃ怖いし・・・」
そしてもう一度出る方法を聞こうとしたら、口を開く前にシャララララーンと聞き覚えのある音がする。
咲人（・・・これは、俺がこの場所に来る時に聞いた音だ。）
キョロキョロと見回すと俺が着地した場所あたりが眩く光っていた。うっと一瞬目を瞑ると開いた瞬間更に驚かされた。
類「ええっと、あぁ、やはりここにいたんだね。」
司「いきなり消えたから驚いたが、まさか咲人もこのセカイに入ってくることになろうとはな！」
えむ「じゃあじゃあ、このセカイも咲人君を受け入れてくれたのかな!!」
寧々「いや、この場合は私達が受け入れたからじゃない？セカイって、そういうもんなんでしょ？」
ミク「ふふ、そうだよー♪」
咲人「・・・・・・」
いや、なんで？なんであいつら普通にここにいんの？なんでなんの疑問も持ってねえの？なんで普通にミクと話してんの？様々な疑問がある頭に過ぎったが・・・・・・なるほど、そうか。
咲人「・・・ふふ」
司「ん、どうした？あ、もしかして1人で不安だったのか？もう心配するな！俺たちが・・・」
咲人「ふふ、はは、あはははは」
司「お、おい、本当にどうした・・・？」
咲人「お前ら、いつの間に俺を誘拐しおったなぁ！なんだここ！出せ今すぐ出せ！怖ぇよ！なんで普通にミクが居るんだ！なんでお前らは馴染んでんだ！グルか？グルなんだな！」
寧々「い、いや、グルじゃないし・・・」
類「まあまあ落ち着きたまえよ。ほらお茶でも飲んで・・・」

咲人「こ、今度は眠らせるつもりか・・・!!」
司「ダメだ、完全に信用を失っている。」
寧々「というか、この反応が普通な気もするけど・・・私たちが受け入れるのが早すぎたんじゃないの？私も最初は驚いたし、類とえむはすぐに受け入れてたけど、司は戸惑いつつもなんかいつも通りうるさかったし。」
司「いやまて、それだと理不尽じゃないか？」
えむ「ねぇねぇ？咲人君行っちゃったよ？」
司・寧々「え？」
２人が振り向くともう結構な距離を走って逃げていた。待て待ってーとミクが追いかけているがスピードがほぼ同じなため追いつけていない。類はミクくんと同じ速度が出せるのか、身体能力が高いんだねぇ？フフ、と怪しげな笑みを浮かべていた。
類「うーん、身体能力は興味深いけれど、とりあえず呼び戻さないとね？とはいえ、あれはえむくんでもないと捉えられないかな？」
司「いや、もう随分遠くだぞ？ミクに任せる方がいいんじゃないか？『他の奴ら』もいるかもしれんしな？」
えむ「うーん、でもなんだか楽しそうだし、わたし行ってくる♪」
そう言うとえむもびゅーーんというオノマトペと共に走り去って言った。
寧々「私も一応ネネロボで追いかけてみる。あいつ、多分ミクより早かったと思うし。」
司「そうか？俺には大した差はないと思うが・・・地の利もえむやミクの方があるだろう？そのうち行き止まりにでも当たるんじゃないか？類はどう思う？」
類「うーん、追いかけた方がいいんじゃないかな？司くんのその考えも悪くないけど・・・それは一般的な身体能力をもつ者限定の考え方だ。」
司「ん、どういう事だ？」
類「実際に見た方が早いと思うよ？ほら、今少しこっちに近づいてきてるから見てみたらどうだい？」

司「んー？」
寧々「ええっと・・・」
そしてふたりがよく目をこらすと・・・
咲人「おわぁぁぁぁ！まて、来るなってのぉ！」
ミク・えむ「まてまてー！」
それは咲人が逃げていてミクとえむが追いかける、いわゆる追いかけっこが行われていたのだが内容がおかしかった。
咲人「くっ、なんで着いてこれんだよ！」
咲人は目に付いた遊具やアトラクション、障害物などを足場にしたり利用して方向転換、などフリーランニングの要領でまるで忍者のように逃げ回っていた。咲人は運動神経が以上に良く、それを自負もしていたがそれに普通に着いてこられる美少女二人を見ていると咲人としては普通に怖かった。それでも咲人の方が1枚上を行っているようで。
ミク「いまだ！つーかまーえた♪」
咲人「なんの！」
不意をつき飛びかかったミクだが難なくミクの2倍の高さをジャンプしてそばにあった壁を蹴り方向転換する。
えむ「えへへー♪ここだー！」
咲人「これしき！」
そして着地先にえむに待ち伏せされる。たしかに空中では身動きが取れずえむの判断は普通に正しかった。普通なら。咲人は空中で身を翻し着地場所を横にずらしてまた全力でダッシュして逃げた！
ミク「うーん、速いねー♪」
えむ「うん、よーし負けないよー♪」
そんなハイレベルな鬼ごっことはもはや言えない何かが行われていた。
司「・・・なんというか。」
寧々「ミクとえむは知ってたし、今更でもないけど、アレは、ちょっと論外じゃない？良くも悪くも。」
類「彼は裏側と声だけでは勿体ないね。彼さえ良ければぜひ表立っ

て芝居もして欲しいものだが、今はそうも言ってられないね？捕まえて説明しないと。」
寧々「じゃあやっぱり私も行ってこようか？ネネロボあれば戦力になるでしょ？」
類「そうだね。お願いするよ。」
そう言うと寧々は先程から言っているネネロボ、寧々とそっくりなロボットに乗っかりかなりのスピードでビューンと駆け出して言った。
咲人「くっ、しつこい・・・てそういえば。」
咲人はここで気がついてしまった。自分は出口を知らない。出られない。そもそも逃げても帰れない、と。
咲人「おいいいいい！まじか、まじか！」
とんでもない事実に気がついた咲人だったがとりあえず二人を疲れさせようと必死に逃げていたが、機械音とともに遠くから何かが来るのが見えた。
咲人「お、おい、マジか、、あんなのありか!?」
もちろん来たのはネネロボだった。さっきまでの咲人なら逃げて疲れさせるだけでよかったが、ネネロボはロボット。体力なんて概念はない。つまり。
咲人（いや最悪！そこまで誘拐したいか！監禁したいか！どんなけ俺って信用ねーんだよ！ちゃんとお仕事はするっての！これでもまともな思考は持ってるっての！とにかく、相手にロボも増えた・・・ならもう、隠れるしか！）
どこぞの下弦デーモンみたいなことを言いびゅんびゅん飛び回ると大きなテントが目に付いた。誰かいるかもしれない、と思ったが迷ってる時間はない、と辺りをびゅんびゅん移動し3人を撹乱し、見失ったと思わせるように上手くテントに入った。
咲人「はぁ、はぁ、あいつらやば・・・人間かよ。あ、人のこと言えねえや。」
と自分にツッコミを入れつつテントの物置的な場所があったのでそこにゆっくり腰をかける。

咲人「ふぅ、とりあえずここに来れば安心、なのか？とりあえずでる方法考えねえと。こんな訳分からんところに監禁はゴメンだ。」
そして考えを整理する。まず最初から思い出すことにした。自分は見覚えのない曲を聞こうとして・・・
咲人「いやまて、それだわ。考える必要ないじゃん、地の文、嘘つくなー。」
・・・なんで俺が責められんの？まあいいや、咲人は曲止めればいいんじゃね？という結論にたどり着きスマホを取り出そうとした、その時だった。
人形「お兄ちゃん、だれ？」
咲人「うおわ!?え？人形？そういやちらほら飛んでたな・・・」
というか、この人形見た目が可愛いクマちゃんだからセーフだけど日本人形とかだったら俺気絶してたぞ？多分。
咲人「あー、ええっとなー・・・」
人形「もしかして、ミクチャンたちが探してるサクトクン？」
咲人「・・・・・・」
人手が増やされてるぅ!!
咲人「え、まさか、探してる？」
人形「ウン、その場にいたオニンギョウサンみんなで探してるよ？」
咲人「まじ？どんくらい？」
人形「ヨンジュウニン位いるよ？」
咲人「ちなみに今俺が変える方法見つけて帰ったって言ったら？」
人形「ミンナにいうよ？」
咲人「ふーむ」
これ詰んでね？俺今普通に話してるこのお人形に命運握られてんの？しかも仮に出れたとして報告すんならあの４人も、下手したらミクも出てくるかも？
咲人「いや、まてよ？」
人形「??」
咲人「なあ可愛い人形さんよ？お腹すいてないかい？」
ここで咲人はピコーン、と思いついた！という顔をして賭けにで

た。
人形「ウン、ちょっと空いた」
咲人「そーかいそーかい。俺さ？飴ちゃん持ってんだけど食べる？」
人形「タベル！」
そう言うと俺が取り出した飴を驚いたことに可愛らしく口を開いた人形がパクッと食べた。
人形「オイシイ♪」
咲人「そうかそうか♪俺甘いもん好きだからさー、これからクッキーとかチョコとか色々持っていてやろっかー？」
人形「いいのー？」
咲人「ああ、だがひとつ頼まれてくんねえか？」
人形「ウン？イイヨ？」
そう言って俺は俺がたてた急ごしらえの作戦を伝えた。聞いた人形はふわふわーと飛んでいき１０数分後沢山の人形を連れてふわふわやっていた。
咲人「よし、他の奴らにバレずに来たかー？」
人形達「はーい！」
咲人「よしいい子だ。まずはご褒美からだな。」
そして俺は本当に４０人近くいる人形達に飴ちゃんをプレゼントして言った。みんな満足そうにハムハムと舐めたり転がしたりしている。
咲人「要件はそのクマの子から聞いたと思うがみんな、俺の頼み、聞いてくれるか？」
人形達「はーい！」
咲人「うっし、上手く釣れた♪」
悪い笑みを浮かべている咲人だったが・・・
司「ここに人形達入っていくのを見たんだなー？」
類「ああ。間違いないよ？ふむ、隠れられる場所も限られるだろうし、手早くみつけようか？」
えむ「はーい♪」

寧々「そうだね。誤解もとかないとめんどくさいだろうし。」
咲人「いやバレてるやんけぇぇ！」
ワンダショ「あ。」
咲人「あ。・・・てへ？」
そういい咲人は観客席の上をぴょんぴょん飛びながらにげる。が、先程の咲人とは明らかに格好がちがった。というのも、
司「な、なんだあの大量の鞄は！」
類「ふむ、あんなに重装備で飛び回れるなんて、本当に彼には驚かされるばかりだ♪」
寧々「はいはい、感心するのはいいからとっとと捕まえる。いくよ、ネネロボ？」
えむ「えへへー♪また追いかけっこだ！」
そう、何故か咲人は両手には手提げカバン、肩下げのカバンを両肩にクロスさせるように2つ、そして大きなリュックを背負っていた。全てパンパンとまでは言わないがそこそこに膨らんで中に何かが入っているのがわかる。
司「そんなものをもってて、４人から逃げられるとおもうか！」
咲人「いいや違うね！持ってるからこそ逃げれるのさ！」
そういった咲人はテントの外に飛び出すと案の定、
ミク「かくほー♪」
ミクがいたが４人しかいなかった時点で咲人はそんな事予想ずみ。むしろここしかタイミングはないと言わんばかりに叫んだ。
咲人「いまだ！」
と叫んで思い切り跳躍した。その瞬間ミクは落ちてくる瞬間を狙い飛びつこうとしたが、次の瞬間驚いた顔をしていた。
司「お、おい、ミク！捕まえたか！って、なんだあれは！」
寧々「ちょっと司、うるさ・・・って」
類「ん、どうしたんだい・・・ほう？これは・・・」
えむ「わぁ！『飛んでるー！』」
テントから出てきたワンダショのメンバーも同じく、いやそれ以上に驚いていた。だって、

咲人「ハーハッハッハ！バイビー！」
そう、咲人は飛んでいたのだ。跳躍、という意味ではもちろんなくどんどん上にあがり、浮遊している。
えむ「すごーい！類くん！なんでなんで??」
類「そうだね・・・ん？あぁ、なるほど。手提げの中、よく見てご覧？」
えむ「手提げ？」
そう、、彼が掲げるように掴んでいる手提げカバンにはよく見ると人形が１０数体入っていた。恐らく他のカバンにも入っているのだろう。
咲人「買収させてもらいましたよーん！さて、今度こそ目のつかないところに行ってここから出ねえと・・・」
と考え始めたがここで異変が起きた。高度が少しずつ下がっている。
咲人「ん、え？おーいみんな？、下がってるぞー？」
人形達「ツカレタ！」

咲人「・・・はい？」
人形達「ツーカーレーターー！」
咲人「なにぃ！」
そう、逃げるより先に人形達がガス欠で大して逃げる前に落ち始めてしまった。
咲人「飴ちゃんあげた時元気いっぱいだったじゃねえかよ！運べる？って聞いたらハコベルー！っていってたじゃんかぁ！」
そう文句を垂れていると本当に力尽きてしまったらしくもはやふわふわーではなく完全に急降下していた。
咲人「おわぁぁぁぁぁ！」
まもなく床にぶち当たると判断した咲人はとりあえず人形達を守るため手提げカバンを抱き抱えるようにしておしりからズドン！と着地した。
咲人「いって・・・着地大失敗だなこりゃ・・・」

よろよろと立ち上がりながら手提げ、リョック、ショルダーと確認すると全ての人形、疲れ気味なのかゆらゆらとカバンから出てきたが全員大事なさそうだ。
ミク「こんどこそ！つーかまーえた！」
咲人「ぐへぇ!!」
安心しきったところに横からミクが見事なタックルを噛ましてきた。
司「よしミク！でかしたぞ！」
咲人「待て待て！逃げたのは悪かったから！人形買収したのも謝るから待ってくれぇ！煮るのも焼くのも待ってくれぇ！あれか!?俺もあの空飛んでるお馬さんのひとつにしてやるってか!?せめてお人形さんにしてくれぇ！なんかこいつらとは馬が会いそうだから！あ、馬が合うなら馬でいいよな？とかもやめてぇ！」
司「いやいや、別に煮ないし焼かないが・・・？」
寧々「これ、いくらなんでも怯えすぎじゃない？」
咲人「当たり前だろ！歌上手い子いるなーって思ったらその子が誘われたショーチームのキャストでじゃあ契約！ってなったらいきなり変なところ連れてかれて挙句の果てに馬や人形が浮いててミクまでいるときた！ここあれだろ！別次元なんだろ！もう二度と現世に返さない的なやつ！スマホも没収されんだろ！」
寧々「・・・なんか半分くらいあってるのがまた説明面倒くさそうなんだけど」
類「うーん、参ったねぇ、僕達が囲んでしまったからかなり錯乱してるようだね・・・どうしたものか・・・」
???「とりあえず元の世界に返してあげて、そこで話したら落ち着くんじゃないかい？」
と咲人が初めて聞く声に振り返るとそこには、
えむ「あー、カイトお兄さんだ！こんにちは！」
カイト「うん、こんにちは。みんなどうだろう？そっちの方がとりあえず都合はいいと思うけど？」
司「・・・そうするか。」

寧々「うん、これ以上面倒にしたくないし・・・」
類「そうだな。済まないねカイトさん、ミクくんお騒がせして。また来るよ。」
咲人「お、おい待ちやがれ！また来るってのはまた連れてくるってことか!?」
寧々「はいはい、もうあんたは帰る。」
そう言うとがスマホを慣れた手つきでぽぽん、とタップする。するとシャララララーンという効果音と共に俺は再び光に包まれた